

# 保健だより

2017年6月1日（木）発行

6月です。気温の上昇とともに今後増加してくるのが、腸管出血性大腸菌などによる食中毒です。食品の十分な加熱、冷温での保存を心がけ、食事前、トイレの後の手洗いを十分に行いましょう。

又、のどの炎症や結膜炎などの症状が出る咽頭結膜熱（プール熱）が、首都圏で流行の兆しを見せています。外出後の手洗いを十分に行いましょう。

〒252-0326 相模原市  
南区新戸5195-4  
**サンガこども園**  
電話046-255-0148



## 子どもの身体的成長の遅れについて

1歳から6歳までの幼児期のお子さんは日々成長、発達します。乳児期ほどの急激な変化はありませんが、この間に目覚ましい成長、発達を遂げます。

成長や発達は遺伝や体質、家庭環境、栄養、内分泌系などのさまざまな影響を受けます。

保育園で実施している身体測定で得られた数値をつないだ成長曲線が大幅に平均を下回ったときなどは、成長の遅れが考えられますが、その判断は容易ではありません。気になるときは小児科のお医者さんなど専門の先生にお聞きしましょう。



## 水分の補給について

水分補給は、栄養補給と同様に大切です。人間の体の水分量は、大人で60～70%、子どもの場合は80%あります。保育園では、決まった時間の水分、夏場はさらに、自由に飲むことができる水分（要求に応じて提供する水分）を用意しています。

暑いときに、「あついあつい！！」と言ったり、じっと我慢したり、遊びに夢中で暑さを気にしないお子さんなど色々ですが、人間は、水分を1%失うと「のどの渇き」を感じ、2%失うと脱水症状が現れるといわれています。子どもの場合、のどの渇きを訴える前に、水分を提供していく必要があります。



## 虫の季節です

皮膚炎を引き起こす原因となる主な虫として蚊、ノミ、ブユ、蜂、トコジラミ、アブ、毛虫などの昆虫類、そしてダニ、クモ、ムカデ等の昆虫以外の節足動物があげられます。これらのうち、「吸血する虫」としては蚊、ブユ、アブ、ノミ、トコジラミ、「さす虫」としては蜂、「かむ虫」としてはクモ、ムカデが代表的で、「触れることで皮膚炎をおこす虫」としては有毒の毛虫(チャドクガの幼虫など)があげられます。他に虫ではありませんが、クラゲやヒトデ、魚類などの海生動物にもさすものがあり、皮膚炎を起こすことが知られています。



チャドクガの幼虫による皮膚炎

治療には、軽症なら市販のかゆみ止めのぬり薬で良いですが、症状が重い場合は抗ヒスタミン薬やステロイドの内服薬が必要になる場合がありますので、皮膚科専門の医療機関を受診しましょう。

【画像出典:横浜市衛生研究所】